

ジョセフ彦 一〇〇年祭記念講演

近代日本の新聞ジャーナリズム

東京大学名誉教授

内川 芳美

ジョセフ彦研究六〇年

ジョセフ彦記念会会長

近 盛 晴 嘉

一九九七年二月二日

於 早稲田大学中央図書館A Vホール

一九九七年二月二日、「ジョセフ彦記念会」と早稲田大学図書館の共催により、わが国新聞の父、ジョセフ彦（浜田彦蔵、一八三六—一八九七）の没後一〇〇年を記念する催しが行われた。

彦研究の第一人者である近盛晴嘉元帝塚山学院短期大学教授（ジョセフ彦記念会会長）より共催の申し入れがあり、図書館がそれを受ける形で実現したものである。近盛氏は本学政治経済学部で卒業で、新聞界で活躍されるかたわら半生を彦研究に捧げてこられた。

早稲田大学図書館との縁は昭和五二年（一九七七）、近盛氏が編纂者となつて、「ジョセフ彦 海外新聞」を、「早稲田大学図書館資料叢刊」の一冊として早稲田大学出版部より影印刊行したことにはじまる。同影印版に用いた底本は当館「洋学文庫」および「西垣文庫」所収のものであった。

当日は青山墓地において彦の墓前祭、早稲田大学大隈会館において記念パーティーの後、中央図書館四階A Vホールにて記念講演および記念小展示が行われた。本稿はその講演記録である。聴衆はおよそ一〇〇名。講演会の司会は元早稲田大学出版部・鈴木吉郎氏がつとめた。（編集部註）

司会

ジョセフ彦一〇〇年祭を記念いたしましたして早稲田大学図書館とジョセフ彦記念会との共催による講演会を開催いたします。

本日は、東大名譽教授内川先生と、ジョセフ彦記念会会長近盛先生にお話をいただきますが、講演に先立ちまして早稲田大学図書館の副館長酒井農史先生からひと言ご挨拶をお願いいたします。

○酒井副館長

本日は早稲田大学図書館の岡沢館長が本日ここでご挨拶しなければならぬのですが、所用のためどうしても出席できないので、副館長である私がご挨拶申し上げます。

本日ジョセフ彦記念会との共催でジョセフ彦没後一〇〇年記念講演会並びに記念展示会が開催できることは、私たちにとって非常に大きな喜びであります。

ジョセフ彦、本名浜田彦蔵に関する記念の催しを本大学の中央図書館がジョセフ彦記念会と共同で行うということは、ジョセフ彦記念会の会長であられる近盛晴嘉先生がいまから二〇年ほど前、彦の手によって発行された『海外新聞』を早稲田大学出版部から復刻出版されたことにちなんでいるわけです。

浜田彦蔵は一八五〇年、兵庫から江戸へ行く途中遭難し、そして米国船に救助されてアメリカに渡って、教育を受けて、その国籍を得て名をジョセフ彦に改めたということです。ジョセフ彦が一八五九年に帰国し、そして横浜の米国領事館に勤務し

て、一八六四年から日本の最初の新聞である『海外新聞』を発売する、そして日米交渉に大きな役割を果たしたということは、もう皆様ご存じのとおりです。

一八五〇年という時期は、世界的な規模でいえば、イギリスが世界全体での覇権を確立し、そして世界全体に君臨した時期であるわけです。そしてイギリスの工業化が最も進んだ時期で、またイギリスで初めて組織的な労働者階級が出てくる時期が一八五〇年代の時期であるわけです。

ジョセフ彦が日本で最初に新聞を発刊した一八六四年という年は、世界的な面では、あの有名なカール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスによって第一インターナショナル、つまり世界的な国際労働運動を指導する組織が初めてロンドンでできるといふ、いわゆる激動的な時期であり、また日本は明治維新の直前にあつた。かつまたアメリカにおいては、一八六一年から五年の間にアメリカの第二の革命といわれる南北戦争があつた。こういうような非常に激動期にジョセフ彦は新聞を発刊するということであつたわけです。

歴史書によりますと、ジョセフ彦は後に横浜と長崎で商業に従事します。そして一八七二年には大蔵省の会計局に勤務して、渋沢栄一のもとで働くというぐあいに記載されています。

この一八七二年という時期は、一八七〇年にドイツがドイツ帝国として初めて新しい統一民族国家がヨーロッパでは成立をするという時期であるわけです。そしてジョセフ彦が大蔵省に

勤務した時期の翌年の一八七三年にはヨーロッパのハブスブルク帝国の首都であるウィーンで世界万国博覧会が開かれました。そしてその世界万国博覧会には明治政府が初めて参加をし、そして日本からも存じのように名古屋城の金のしゃちほこが展示されるような時期でした。また明治維新の後のいろいろな不平等条約を改正したり、あるいは日本国憲法をつくるので岩倉使節団が一八七二年にちょうどヨーロッパにいて、ウィーンの世界万国博覧会にも行きました。そして日本ではこの万国博覧会の最高責任者が大隈重信侯であったということです。

そういう面では、ジョセフ彦が生きた時代というのは非常に大きな歴史的な激動期であったということがいえるだろうと思います。非常に広い視点を持ったジョセフ彦が一体どういう役割を果たしたかという点で、この時期の彼の役割を考えると、いろいろと夢が膨らむような思いで、このジョセフ彦についてのパンフレットその他を私自身は読んだわけです。

本日は東京大学名誉教授の内川芳美先生並びにジョセフ彦記念会会長の近盛晴嘉先生のご講演をいただきます。非常に有益なお話が伺えるものと思ひ、楽しみにしております。簡単ではございますが、早稲田大学図書館を代表してひと言ご挨拶申し上げます。どうもありがとうございます。(拍手)

司会 ありがとうございます。

それでは講演に入らせていただきます。内川先生よろしくお

願いいたします。

近代日本の新聞ジャーナリズム

○内川芳美東京大学名誉教授

すっかり風邪をひきまして、お聞き苦しいと存じますがお許しいただきたいと思ひます。

話に入る前にひと言申し上げたいことがあります。きょうの会はジョセフ彦の没後一〇〇年記念の講演会でございます。彦については、いま酒井先生から簡単にアウトラインのご紹介がございました。なお、私の後に皆様ご期待の近盛さんのお話がございます。そこでさらに詳しくお話があると思ひますが、彦は播磨国、つまり現在の兵庫県の在の一介の百姓の息子でございました。一三歳のときに漂流して米船に救助されアメリカへ渡りました。その彦が日本に帰って、『海外新聞』を創刊し、そしてその他当時の日米交渉、あるいは明治初期の日本の国づくりにかかわる仕事に従事しました。そういう彦の仕事に早くから光を当て、今日の没後一〇〇年の記念行事にまで結びつけてこられたのは、ほかならぬ近盛さんであります。

私は近盛さんと四〇年来のご交誼をいただいている者です。そのきっかけも彦でした。近盛さんのきょうの講演の題は「ジョセフ彦研究六〇年」とあります。たしか近盛さんはことし八七歳になられるはずで、六〇年と申しますから、単純に